# 8・15 玉音放送

## あの日の空　とやま戦後70年　読者の記憶から

### なぜ意味ない戦争を

**石黒富子さん（90）　富山市高園町**

70年前、夫は兵隊として富山中学（現富山高校）に駐屯していた。8月1日午後4時ごろ、富山市東中野の自宅に夫が来て「今夜、空襲があるから逃げなさい」とだけ言って去った。

その夜、市内が真っ赤に燃えた。富山大空襲。「ゴー」と音を立てる火風が怖かった。富山中学へ避難すると、60代の男性が町名を叫びながら遠くを指さし、「おらの町も燃えてしもた」と言って泣き崩れた。女性たちは黙って涙をこらえていた。私が背負っていた生後10カ月の娘ら声を上げなかった。

町内で続けていた、はたきを使った消火訓練は役に立たず、当時から「この戦争は負ける」と思っていた。戦争は何の得にもならない愚かなものだ。

自宅が焼け、娘と現在の同市婦中町速星の実家で終戦を迎えた。2人の姉も子どもを連れ、実家に戻っていた。70年前の8月15日、ふだんは軍艦マーチを鳴らしていたラジオから玉音放送が流れ、家族全員で声を上げて泣いた。敗戦を残念に思うと同時に、なぜ意味のない戦争をしたのかという無念さがこみ上げてきた。

**玉音放送**　天皇の声で行われる放送。1945年8月15日正午に流れた昭和天皇が終戦の詔書を読み上げるラジオ放送を指すのが一般的。終戦前日の14日、皇居内の防空壕（ごう）「御文庫付属室」でポツダム宣言の受諾を最終的に決めた昭和天皇が、同日午後11時25分、宮内省（当時）の内廷庁舎執務室で2回にわたり録音した。レコードの原盤は46年7月、複製を作って保管したいという連合国軍総司令部（GHQ）に貸し出されたが、返却後は昭和天皇の住まいだった吹上大宮御所で長年管理。98年からは宮内庁が庁舎の金庫室などで厳重に保管しており、今月1日に原盤レコードの音声を初めて公開した。

webunで、宮内庁が公開した「玉音放送」原盤の音声と「食糧問題に関するお言葉」の音声が聞けます。皇居・御文庫付属室の映像も見られます。

### 「兄弟帰る」うれしさ

**此川　とみゑさん（89）　黒部市宇奈月町下立**

実家にはラジオが無かったので、近所に玉音放送を聞きに行きました。満州事変や支那事変（日中戦争）から勝ち続けていると思い、日本が勝つと信じていたので、「負けたわ」と実感するだけで他に何も考えられませんでした。でも、これで戦争に行った兄弟が帰ってくると思うと、うれしかったです。

小学校4年生から戦争に入り、先生が出征のために1年間に4人も代わりました。きょうだいは男5人。長男は召集されて戦場へ。次男は志願、三男は学徒特攻隊で東京から戦場に行きました。下の弟は少年航空兵に志願し、一番下の弟も志願していたのですが、若かったので召集はありませんでした。

大本営は負けていても勝つことばかり放送しました。2番目の兄はサイパンで玉砕しました。白木の箱には遺骨が入っていると思ったら、名前を書いた紙1枚だけでした。

女の私は戦地の兵隊さんのお世話をしたいと心に決め、看護婦の免許を取って赤十字へ入って猛勉強しました。食べ物もなく、ひもじい思いをしました。終戦になり、農地改革で「封建時代」が終わりました。平和になりました。

### 「だらな戦争だった」

**高柳　弘さん（94）　射水市二口（大門）**

満州、沖縄を経て行き着いた台湾で、軍の上官から敗戦を聞かされた。16歳の時に開拓義勇軍として満州に渡ってから9年が過ぎていた。悔しかったのか、悲しかったのか、もう忘れた。ただ、涙が出た。

小学校高等科を出て紡績工場に勤めたが、「こんなところにいても仕方ない」と思って義勇軍に入った。あのころは国を挙げて「満州へ」とやかましかった。ハルピンで徴兵検査を受け1942年に歩兵第35連隊の大砲隊に入隊。任務は満州とソ連の国境付近の警備だった。

幸いソ連と戦闘にはならなかったが、演習はつらかった。「密林通過演習」は30キロ近い砲の部品などを持ち、2日間歩き通す。軍隊のやることはめちゃくちゃだ。

零下30度にもなる極寒の地で、「誰が凍傷になりやすいか調べる」などと言って裸で外に放り出されたこともあった。

戦争終盤にやったのは穴掘りばかり。沖縄で陣地造りをし、沖縄戦直前に台湾へ移って地下壕を掘った。大砲隊にいながら、実戦で撃ったことは一度もなかった。ありがたい事かもしれないが、「あんなだらな戦争はない」という思いは消えない。

---

## 連載に　お便り続々

### 第8章「烈火の夜」

「あの日の空」の第8章「烈火の夜」で、1945年8月2日未明の富山大空襲をテーマに8回にわたって連載記事を掲載したところ、空襲や登場人物にゆかりのある読者から手紙が届きました。それぞれの体験や思いを紹介します。

### 貨物列車から瀕死の人

**須藤　光夫さん（83）　富山市水橋市江新町**

当時の自宅周辺の図を書いて説明する須藤さん＝富山市水橋市江新町

第4回では、当時の国鉄の機関士見習いが長い貨物列車を待避させたエピソードを紹介した。列車が止まった地点（現在の富山市鍋田周辺）のそばに住んでいた須藤光夫さん（83）＝同市水橋市江新町＝からは、その列車を見たとの手紙が届いた。

須藤さんによると、2日未明、列車が家の前で止まった。空が白んだころ、機関車の後ろにある屋根付きの車両から大勢の人が降りてきた。状況を聞こうにも、ほとんどの人が放心状態。東田地方町にあった富山赤十字病院に入院していたという患者とその家族は「命からがら、機関車に飛び乗った」と明かした。

自宅の物置きは病人やけが人でいっぱいになり、野戦病院のようだった。目がつぶれ、胃の管がむき出しになっている重傷者もいた。「生死をさまよう人に何もできず、つらかった」

燃えさかる市街地はどれほど熱かったか―。

そんな思いから、懸命に井戸水を汲んで飲ませた。「食料はなかったけど、水ならあった。『最高のごちそうだ』としゃぶりつくように飲む人たちの姿がまぶたの裏に焼き付いている」

### 藻谷銀河は思いやりの人

**二俣　良則さん（82）　射水市赤井（大島）**

祖母の遺影を持つ二俣さん＝射水市赤井

第7回では、大やけどを負って亡くなった歌人・藻谷銀河（本名・六郎）と、遺児の研介さん（83）を取り上げた。手紙を寄せた射水市赤井（大島）の二俣良則さん（82）は「祖母が旧小杉町にあった藻谷家に女中として働いていた縁で、父と叔父は六郎さんと懇意にしていた」と話す。

二俣さんは「六郎さんは私の祖母が亡くなった後、お盆には必ず墓参りに来てくれた。直筆の和歌を贈ってくれるなど、思いやりのある人だった」と振り返る。

新湊に住んでいた叔父からは、空襲があった2日に六郎を心配して富山市に向かい、川で倒れていた六郎を見つけたと聞かされた。「発見した時点で、手の施しようがないほどのやけどだったそうだ」と話した。

### 終戦をめぐる経過

**1941**
- 8・12　防空壕（ごう）として皇居に御文庫付属室の建設開始
- 12・1　御前会議で米英蘭との開戦を決定
- 12・8　真珠湾攻撃で太平洋戦争開戦

**1944**
- 7・7　サイパン守備隊全滅

**1945**
- 3・10　東京大空襲、皇居でも火災
- 5・8　ドイツ、無条件降伏
- 6・2　枢密院会議で防空壕で開催。天皇が臨席する会議の場として初めて防空壕を使用
- 6・23　沖縄戦終結
- 7・26　連合国がポツダム宣言発表
- 7・29　防空壕の補強工事完了
- 8・2　富山大空襲
- 8・6　広島に原爆投下
- 8・8　空襲警報が発令され、昭和天皇が香淳皇后と初めて防空壕に避難
- 8・9　長崎に原爆投下、ソ連が対日参戦
- 8・10　防空壕で御前会議を開催。天皇の地位存続を条件に、ポツダム宣言を受諾する案を昭和天皇が支持
- 8・14　防空壕で御前会議。無条件でのポツダム宣言受諾を決定
- 8・15　終戦の詔書をラジオで玉音放送
- 9・2　政府が降伏文書に調印
- 11・7　日光に疎開していた皇太子（現天皇陛下）が帰京

### 取材班から　「あの日」知る2冊

「あの日の空」の担当となり、戦争に関連する書籍を何冊も読みました。その中でも取っ付きやすく、通史を偏らずに理解でき、かつ面白い本が2冊あります。

きょうの8面に寄稿がある半藤一利さんの『昭和史　1926―1945』と、保阪正康さんの『あの戦争は何だったのか』です。碩学2人の知られた本で、若手のルポや他の新聞社の企画の参考文献にもよく挙げられます。

大本営、国体、陸軍、ゲートル…。若い記者から、取材先で分からない言葉が多くて困るとよく聞きます。年配者や歴史通には簡単過ぎる2冊かもしれませんが、戦争体験者の子や孫に当たる私たちにはそうでもありません。わが書は付箋でいっぱいです。

「戦争を知らない私たちには、よその国のことのように思えても、まぎれもなくこの国の歴史」。『昭和史』の表紙にある私より10歳年上の作家、宮部みゆきさんの惹句です。

戦後70年。折しも「この国」と戦争が議論になっています。「8・15」を深く理解する意味でも、お盆休みのひとときを読書に充てるのはどうでしょうか。

（社会部部長デスク・片桐秀夫、44歳）

第8章「烈火の夜」を含め、これまでに掲載した連載「あの日の空」はwebunで読めます。